

都道府県・ 指定都市番号	13	都道府県・ 指定都市名	東京都	研究課題番号・校種名	2(4) 高校
				領域名	E S D
研究課題	学校全体で取り組む研究課題 (4) E S Dを学校全体で体系的に推進するための教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究				
指定年度	平成28年度～平成29年度				
学校名 (児童・生徒数)	東京 都立 多摩 高等学校 (594人)				
所在地 (電話番号)	東京都青梅市裏宿町 580 (0428-23-2151)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://www.tama-h.metro.tokyo.jp/site/zen/page_0000000_00034.html http://www.tama-h.metro.tokyo.jp/site/zen/page_0000000_00027.html http://www.tama-h.metro.tokyo.jp/site/zen/page_0000000_00034.html				
研究のキーワード	<p>○学校を地域に開き、社会とつながることで学びの価値を問い直す</p> <p>○地域の期待に応じて連携し、感謝される機会を得ることで生徒を勇気づける</p> <p>○様々な年代・国籍の方々とつながることで自らのライフヒストリーを省察、ケアの考え方を持つて人と接するコミュニケーション能力を持った市民育成</p>				
研究結果のポイント	<p>○学校を地域に開き、社会とつながることで学びの価値を問い直した結果、学習意欲が向上した。 地域の問題や文化と授業や行事を通してつながり、実際に学んだ内容が実社会で役に立っていることを生徒たちが実感することができた。学校と社会が分断された世界ではなく、つながりを意識することで学習への主体性、意欲の向上が確認できた。保護者とのつながりも強化され、保護者の教育活動への参加率が向上した。</p> <p>○地域の期待に応じて連携し、感謝されることで生徒を勇気づけ、自己肯定感を高めた。 地元企業・自治体等と連携し、多様な行事や授業に主体的に参加することで、学内外の方々から感謝される経験をすることができた。また、多数の新聞・テレビの取材を受けたことで自らの学習活動が肯定的に取られることを知った。これらの事柄から勇気づけられ、自己肯定感を高める生徒が増加した。</p> <p>○様々な年代・国籍の方々とはつながることで自らのライフヒストリーを省察、ケアの考え方を持つて人と接するコミュニケーション能力を持った市民を育てた。 小学生から高齢者、外国人など多様な人々と交流することで、排除ではなく、ケアの考え方を持つて人と接するコミュニケーション能力を育てた。また、自らのライフヒストリーを省察し、将来を想像して主体的・計画的に学ぶ生徒が増加した。</p>				

1 研究主題等

(1) 研究主題

進路多様校における、地域連携型授業を活用したカリキュラム開発

(2) 研究主題設定の理由

本校は都内でも有数の伝統校であり進路多様校である。中学校までの講義形式の授業に困難を感

じた生徒が多く、自己肯定感が低い。将来における勉学の意義を見出せないため、学業半ばで退学を選択する生徒も少なくない。家族や地域、友人など社会とのつながりの希薄さは、彼らの生きる視野を狭めさせ、自己肯定感を低くしている一因である。生徒たちに地域や社会とのつながりを実感させ、未来に向けた広い視野を醸成することは喫緊の課題である。

生徒と教師が周辺住民、周辺の豊かな自然などに触れ、地域活動に問題解決意識を持って取り組むことで、自主的かつ積極的に学び、考え、行動する力を付ける。生徒が地域とつながり、そのつながりの中で認められる体験を積んで自己肯定感を高める。「共生」している自分を知り、実践的な経験を積むことで得られる生徒の変容を量的・質的に評価する。その評価を軸に、ESD の考え方を基通した「地域連携型授業」のカリキュラムを提案する。

(3) 研究体制

研究特別顧問常 國佳久校長（国語科） 延味道都副校長（国語科） **アドバイザー**本間（社会科）
研究主任望月（芸術科） **研究員**白木・畠山（数学科） 重田・川崎・曾田（英語科） 梶原（体育科）
 酒井（家庭科） 小寺（情報科） 吉田（理科専修助手） 佐々木・森山（国語科） 安達・岸川（社会科）
 木村（理科：化学） 渋谷（理科：生物） 小岩（芸術：音楽） 以上の教員が、地元の社会的資本・資源（おうめ若者カフェ、たましん、青梅青年商工会議所、青梅観光協会など）と結びつき地域連携型授業を行うことで、平成 28 年・29 年の ESD 研究を行っていく。

(4) 1 年間の主な取組

平成 28 年度	<p>1 学期（4 月～7 月）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ESD 研究授業・行事として 16 活動実施 <p>青梅大祭参加</p> <p>東京都立多摩高等学校がある東京都青梅市には、青梅大祭という伝統ある祭りがある。地元の 12 の町から出される山車が市内を引かれて進む様子は圧巻である。しかし、高齢化の波が押し寄せ、山車の引手が不足しがちであった。そこに都立多摩高等学校の生徒たちが引手として参加した。地域の歴史や伝統に触れながら、地域の方に感謝される機会を得ることができた。</p> <p>2 学期（8 月～9 月）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ESD 研究授業・行事として 11 活動実施 <p>生物の授業「ハクビシンとの戦い！」</p> <p>栽培の授業を行った。生徒たちが畑を耕し、種をまき、世話をし、収穫し、その野菜を食べるまでを通しての授業となる。収穫はまだ先の作物もあるが、ミニトマトは既に収穫し、実際に食べた。また、青梅市特有の問題として、近隣に生息するハクビシンが、作物を荒らす害獣である。生徒たちは、ハクビシンとのたたかい！というサブテーマをつけ、柵を作る作業も行った。</p> <p>文化祭での多様な交流</p> <p>オープニングセレモニーにおいて地域市民が舞台参加を行った。地域に伝わるお囃子をセレモニーで生徒たちに披露した。地域店舗・企業とコラボレーションし、生徒たちが企画・活動を行った。地域市民が地元の文化財や古い資料などを持ち寄り、展示を行った。ESD 研究成果の展示を行った。外国人の方向け文化祭案内英語ツアーを企画し、実施した。</p> <p>2 学期、3 学期（10 月～1 月）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ESD 研究授業・行事として 16 活動実施
----------	--

英語の授業「外国人の方向け青梅ツアーを作ろう」

青梅市観光協会と協力し、外国人の方向けツアーを作成し、実際に実施した。まず、観光協会の方がビデオレターで、この授業の取組への感謝を伝えた。生徒たちは有意義なプロジェクトに取り組めることに発奮し、英語でのツアーを作り出した。観光協会の方が最も良いツアーを選出し、採用した。選ばれた生徒は誇りを持ち、ツアーの宣伝ポスターを自主的に英語で制作し、町に展示した。ツアーは実際に青梅市観光協会のHPで宣伝され、開催された。ツアーコンダクターとして生徒が英語で外国人の方に案内を行った。

森林保全活動

青梅の林業について歴史や伝統を学び、実際に一日かけて林業体験を行った。地域の林業で働く方たちが運営を手助けする。本物の杉やヒノキを倒す林業体験は、生徒たちにとって地域の自然を見直す契機を与えた。また、木を倒すことが保全活動になることに新鮮な驚きを覚え、里山の大切さや環境問題を考える契機となっている。

2月以降

・ESD 研究授業・行事として3活動実施予定

2 具体的な研究活動

(1) 研究内容

研究の視点

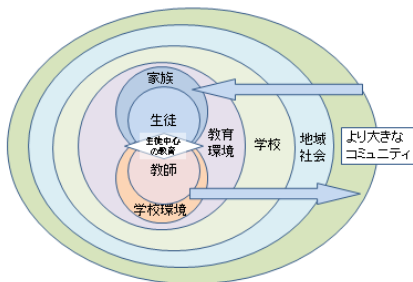
地域とのつながりに着目し、「自然・環境」「産業・経済」「人間・生活」の3分野にわたって継続的な地域連携型授業を実施する。授業の振り返りと評価を通して、「全てのレベル (at all levels) と場(in all settings)」(ESDに関するグローバル・アクション・プログラム2014)に着目した地域連携型カリキュラムを開発する。

手立て

地域連携授業・行事を行い、複数の教科が上記の三分野にわたって学ぶ機会を設ける。各教科の授業に地域の外部講師を招聘する(学習内容の拡張)、地域に生徒が出向き学習するフィールドワークを行う授業(空間の拡張)、キャリアデザインやHRの時間も有効に活用し(時間の拡張)を通して、地域の一員として参加する課題を見出し、協働的に問題解決を図ることで持続可能な社会づくりの構成概念が醸成されると考える。豊かな自然を意識し、地域の中で認められる経験は彼らの学校生活を支え、社会人としての責任や持続可能な社会についての教育が可能であると考えられる。

(2) 具体的な研究活動

本校における生徒と教師のコミュニティ

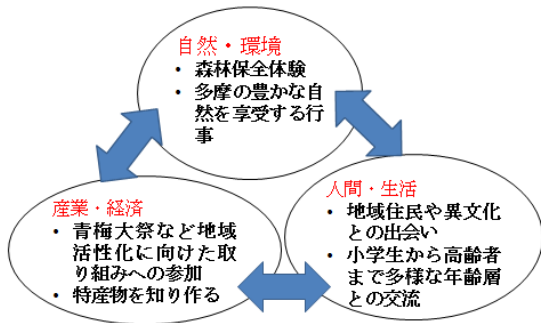


概念図として、質の高い医療従事者の教育を模索した先行研究、The urban and community health pathway: preparing socially responsive physicians through community-engaged learning. (Linda N, Johnson SL, Gilbert IA, 2011)における、学習者とコミュニティとの関わりを示す図を参考にした。クラスメート、学年、学校生徒などとの交流を第一のステップとして設定した。これらのステップを踏んで自信を

つけた後、学外のコミュニティとのつながりを意識したカリキュラムを展開していく。

全体を通して意識したことは、生徒たちが持つ資質や能力、生徒たちが身に付けた知識や技能を身近な実社会である地域社会で使うことである。使うためには、その社会とつながっている必要性が生じる。ESD 研究を授業に取り込むために、他との「つながり」を意識して各課の教科の目標を立てた。さまざまなアイデアが提案され、座学の域を超えた授業展開となった。

地域連携型授業の実施



一年間の主な取組に示した通り、多種多様な地域との交流授業・活動が展開された。これらの振り返りや、データの保管、情報の周知などにはクラウドシステムを利用した。学校行事、学年行事、教科のあらゆる段階において、自然と環境、産業と経済、人間と生活の三つのアプローチで地域性を取り入れた。

また、常にフィードバック（講師の方の感想や、地域の感謝の言葉など）を行い、活動を通して自らの自信につながるよう工夫した。

3 研究の結果と今後の取組

(1) 研究の結果

○4月に行ったアンケート調査と TK 式バッテリーM2 調査により、以下の傾向が明らかとなった

アンケート結果

生徒の特徴

中学生時に不登校経験者、多い遅刻・欠席

中学校の学校行事に主体的参加経験が無い
→学校に友だちも無く、自分の居場所がない

学習と自分の生活がつかない
→学習する意義がつかない→学習意欲の低さ

複雑な家族の問題を抱えている
→暖かい人間関係を求めている

● 全校生徒の25%が学習困難や家庭問題を抱えている

この傾向を踏まえながら、地域連携型のカリキュラムを進める中で、以下のような変容が現れた。

○生徒の変容：地域活動への生徒の自主的参加増加・学習意欲の向上・選択科目座学選択生徒の増加・欠席・遅刻をする生徒の減少・学習や行事へ意味ややりがいを感じる生徒の増加・人を助けたり、教えたりすることへの意欲の高まり・転退学生徒の減少

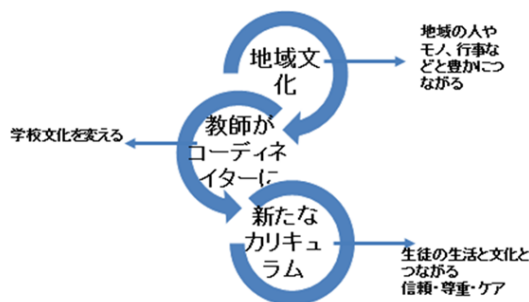
○保護者の変容：保護者の教育活動への参加増加

○教師の変容：生徒に求める学習レベルの向上・学びの質の変化のため研修の増加

○地域の変容：地域からの学校への期待や、地域行事への参加希望の増加（取材や依頼の増加）

(2) 今後の取組

地域連携型授業によるカリキュラム開発の示唆



生徒たちの生活や文化を尊重しながら、学校と地域文化をつなげていくコーディネーターとして教師の役割が重要となる。多様性を受け入れるための学校づくりが課題である。

今年度 ESD 教育課程研究としての活動は 43 回にも上った。今後はこれらの活動自体を評価・省察し、生徒に育成しようとする力を見極め、精査することが課題である。平成 28 年度は当初の計画通り、体験の年と考える。平成 29 年度は探求の年として活動の

意義や目的を、今年度の生徒の変容を踏まえて明確化、類型化して授業や行事を実施していきたい。